

氣比神宮末社 擬領神社と 黄蕨(吉備)国

会員 丸谷憲二

1 はじめに

吉備国の語源「黄蕨」を調査していて、黄蕨(吉備)国と越前国が強く結びついている事実を発見した。氣比神宮(福井県敦賀市曙町)末社擬領(おおみやつこ)神社と化氣神社(岡山県加賀郡吉備中央町案田)である。祭神より黄蕨(吉備)国との関係を考察したい。

2 氣比神宮の祭神と末社 擬領神社

越前国一宮・北陸道総鎮守、氣比神宮の祭神は、伊奢沙別命(いざさわけのみこと)を主祭神として7柱を祀る。仲哀天皇(ちゅうあい)・神功皇后(じんぐう)・応神天皇(おうじん)・日本武尊(やまとたけるのみこと)・玉姫命(たまひめのみこと)・武内宿禰命(たけのうちのすくねのみこと)である。

末社に擬領神社がある。擬領神社の祭神は武功狭日命(たけいさひのみこと)である。武功狭日命は吉備臣祖稚武彦命の孫である。稚武彦命(わかたけひこのみこと)で吉備国と直結する。



擬領神社

氣比神宮

2.1 擬領神社の擬領(おおみやつこ)とは

氣比神宮のHPの説明が下記であるが、擬領(おおみやつこ)の意味が不明である。擬領は「おおみやつこ」とは読めない。

擬領神社[おおみやつこ]

社記に武功狭日命(たけいさひのみこと)と伝え、一説に
大美屋都古神(おおみやつこのかみ)又は玉佐々良彦命
(たまささらひこのみこと)とも云う。

『舊事紀』には「蓋し當國國造の祖なるべし」と載せてある。
「おおみやつこ」とは、「大領」のことである。

『日本国語大辞典第二版第2巻』

おお-みやつこ[大領][名]律令制の郡司(ぐんじ)の長官。
少領、主政、主帳を指揮する。大郡、上郡、中郡に設置。

『日本国語大辞典第二版第8巻』

たい-りょう[大領][名](「だいりょう」)とも。令制で郡司
の長官。在地の有力豪族を任用する。おおきみやつこ、こ
おりのみやつこ。郡司。

「大領」とは、郡司(ぐんじ、こおりのつかさ)
のことである。

『日本国語大辞典第二版第4巻』

ぐんじ[郡司][名](「ぐんし」)とも。令制下の地方官。国
司の下で一群を統治した。大化改新(645年)に始原が
あるが、大宝令以後は大領・少領・主政・主帳の四等官で
構成される。郡司は以前の国造の系譜を引く現地の豪族
が優先的に補任され、終身官で代々世襲された。これは
律令制の他の官職に比べ、極めて顕著な特徴である。郡
職。



角鹿神社

『国史大辞典4』

ぐんじ[郡司]律令時代に国の下級地方行政組織であつ
た郡の官人の総称。大領・少領・主政・主帳の四等官より
成るが、狭義には大領・少領のみを指し、これを郡領とも
いった。令制は郡を五等級に分けて定員を定めているが、
郡の規模の縮小、軍事的機能の軍団への移譲などにより、
郡司の権限は大きく削除された。また正員のほか員外郡
司、権任郡司、擬郡司などがあり、

「擬大領」は正式な役職名である。擬領とは「擬大領」のことである。

擬領の正確な表記は、擬大領である。擬郡司が擬大領である。擬大領の名前は、『古事類苑 官位部二』に多く収録されている。「郡司擬大領外正七位下忍海連法唐」「擬大領正七位下難破忌寸」「対馬嶋下縣郡擬大領外少初位下直氏成」「擬大領正七位上依知秦成益」「副擬大領外正七位下依知秦公名手」等々。

甲斐国一宮浅間神社では「八代郡擬大領、社家の祖」と正確に伝承されている。

甲斐国一宮 浅間神社 境内末社「真貞社」 八代郡擬大領

真貞社とは甲斐国一宮 浅間（あさま）神社（山梨県笛吹市一宮町一ノ宮 1684）の境内末社である。祭神は伴直真貞公である。伴直真貞公とは、貞観6年（864年）富士山噴火時の八代郡擬大領であり、社家の祖である



擬領（おおみやつこ）神社とは『擬大領神社』であり、祭神は武功狭日命である。社家の祖である。『先代旧事本紀大成経 国造本紀』に「角鹿國造」と記録されている。』

『先代旧事本紀大成経』国造本紀

「角鹿（つめが）国造

高穴穗宮朝、御代黄麻臣祖若武彦命孫建功狭日命、任定二賜国造一」

2.2 稚武彦命

稚武彦命は孝霊天皇（こうれい）の皇子で、子に吉備武彦命（きびのたけひこ）がいる。記紀に下記の記録がある。

『古事記』孝霊天皇段

「大吉備津彦命と若武吉備津日子命（わかひこたけきびつ あひたぐ はりま ひかは さき ひこのみこと）とは、二柱相副ひて、針間の氷河の前に いはひべ す 忌 瓮を居ゑて、針間を道の口として、吉備国を言向け和したまひき。」故、此の大吉備津彦命は、吉備の上つ道臣の祖なり。次に若武吉備津日子命は、吉備の下つ道臣の祖。彦五十狭芹彦命（ひこいさせりひこのみこと）。亦の名は吉備津彦命。…亦妃姫某弟（またのみめはへいろど）、稚武彦命を生む。「弟（いろど）稚武彦命は、是吉備臣（きびのおみ）の始祖（はじめのおや）なり。」

3 化氣神社

吉備国に化氣神社がある。「氣比神宮」の「氣比（けひ）⇒化氣（けぎ）」、「比⇒化」、「角鹿（つめが）⇒鹿角」と変化している。化氣神社は備前国津高郡上田村案田（岡山県加賀郡吉備中央町案田）化氣山に鎮座している。創建は養老年中（717～723）である。祭神は大和漆上郡春日大明神4柱「武甕槌神、齋主神、天兒屋根神、比賣大神」と伊奢沙和氣神の5柱である。第十代崇神天皇の十年孝霊天皇の皇子大吉備津彦命四道將軍の一員として吉備国に派遣。異母弟若日子武命と共に針間（播磨）国から本宮山の峯に来られた。化氣山山上に御食津神（伊奢沙和氣神）を祀られた。氣比神宮の主祭神である。化氣神社に鹿の角の彫刻が多くある。本宮山への登山道に「旭川源泉」の湧水がある。



化氣神社



鹿の角・彫

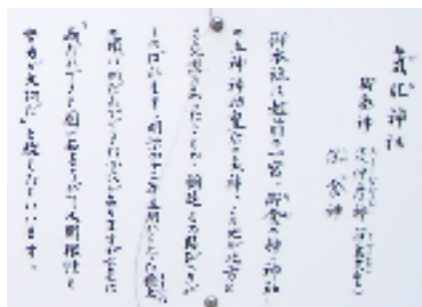
4. 豊原北島神社の境内摂社 氣比神社

『岡山県神社誌』に収録されている氣比神社は、豊原北島神社(瀬戸内市邑久町北島)の境内摂社のみである。祭神は応神天皇・神功皇后・比め大神・豊原北島神である。

境内摂社・氣比神社の説明に「祭神 足仲彦神(たらしなかつひこ・仲哀天皇)・保食神。この地が北方とも交流があったことや、朝廷との結びつきがしのばれます。」とある。氣比神社の祭神名を保食神と品陀和氣命(応神天皇)の父、足仲彦神(仲哀天皇)としている。



豊原北島神社



氣比神社

5 『備前吉備津彦神社縁起写』と 『備前吉備津彦神社旧記断簡』

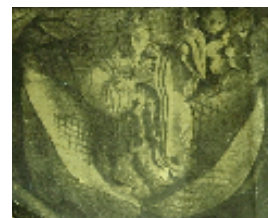
『備前吉備津彦神社縁起』延宝丁巳(延宝5年・1677)朱印に、「山陽道 備之前州 一品宮者、人皇第七代 孝霊天皇 第三之皇子 五十狹芹彦命(いさせりびこ)也、又名 吉備津彦命、母謂細媛命。一品 吉備津彦大明神 併相殿神 吉備津武彦命、孝霊天皇三世之孫也」とある。『備前吉備津彦神社旧記断簡』に、「孝霊天皇三男三女 第一孝元天皇、第二越前一宮、第三備中一宮、長姫宮、第一備前一宮、第二尾張宮、第三讃岐一宮、備後一宮一門タリ」とある。第二越前一宮より氣比(けひ)神宮との関係が確認された。『備前吉備津彦神社縁起写』は、五十狹芹彦命と『日本書紀』に

よる表記がされている。

5.1 氣比神宮旧本殿内陣の桃太郎像



戦災で焼失した旧本殿内陣の柱に桃太郎の彫像があった。髪を美豆良(みずら)に結び、扇を手にひれを両肩から掛け、舞うような姿で桃から現れる。美豆良に注目したい。美豆良は古墳時代の男性埴輪に見られ、茨城県武者塚1号墳(7世紀後半)から左側のみ、ほぼ完全なミズラが出土している。ミズラは大陸の北方文化とされている。この桃太郎像については氣比神や氣比社の成立にも関わる推測説がある



とされている。氣比神宮「桃太郎誕生地」説がある。「桃太郎像」は慶長19年(1614年)福井藩祖結城秀康が寄進した本殿内陣の柱に彫刻されており、氣比神宮の桃太郎が最古の桃太郎像である。『備前吉備津彦神社旧記断簡』の「第二越前一宮」との関係と推定している。

5.2 氣比神宮・女桃太郎説

桃太郎像の衣装が平安時代の女房装束(しょうぞく)だとする女桃太郎説がある。十二単(ひとえ)は皇室の正装であり、平安時代の女房装束をもとにしている。檜扇の手もとの袖のあたりを見ると3枚ほど重ね着をしている。十二単であると推定できる。髪飾りから女性であると推測できる。髪型は、上の方は髪を結っているような、そして下の方は髪を結っていないような感じである。これは奈良時代の女性の髪型に近い。右手に檜扇(ひおうぎ)を持っている。ヒノキの板で扇子(せんす)を作ったものである。檜扇も平安時代の女性の正装条件である。

女桃太郎説のモデルは誰か、吉備国の住人であれば吉備津彦命の姉の名前、ヤマトトヒモ

モソヒメを連想する。倭迹迹日百襲媛命は岡山神社の主祭神で、讃岐国一宮・田村神社の主祭神でもある。倭迹迹日百襲媛命の気比神宮滞在を記念に残す為の桃太郎像となる。倭迹迹日百襲媛命は大物主神(大神神社の祭神)の妻となる。箸墓古墳は、宮内庁によって第7代孝霊天皇の皇女、倭迹迹日百襲姫命の墓として管理されている。この古墳を卑弥呼の墓とする研究者も多い。

5.3 気比神社伝承と桃太郎伝説

福井県には、気比神宮の他に気比神社が10社ある。気比神社(福井県丹生郡越前町気比庄)は気比神宮の勧請社とされ、福井県内でも屈指の歴史を持つ古社である。現在の宮司は角鹿尚計氏である。敦賀の地名説話に登場するツヌガアラヒトの子孫である。初代の角鹿国造から63代目、本家気比神宮の島家より分家して13代目にあたる。

『鯖江精機通信 創刊春号No.1 特集 気比庄』に、「角鹿家の先祖キビツヒコは、桃太郎伝説の桃太郎説もあり、気比庄には特異な桃太郎伝説があったらしい。(気比は「きび」と読むことができる。)」とある。

(角鹿尚計氏は、福井市立郷土歴史博物館副館長。2002年角鹿国造家を継承し宮司就任)

6 突厥国と敦賀

武智鉄二氏の「突厥国からの渡来人説」を紹介する。

①「テュルク族(突厥国)の王は可汗(カカン)、王妃は可賀敦(カガトン)と呼ばれる。可汗は加賀国(石川県)の語源をなすものではないだろうか。可賀敦の下二字をひっくり返すと、そのまま敦賀になってしまう。」とし、「テュルクの転化と考える他はない。そうでなくては、縄文後期の製鉄遺跡の説明がつかない。」

② 日本へ製鉄技術が渡来し、一番古い登り窯は石川県加賀市豊(ゆたか)町の瓢箪池二号炉(BC500~300)とされ、同一年代の鉄遺跡が福井県

金津(かなつ)町細呂木(ほそろぎ)駅製鉄跡Ⅰ(BC550~370)である。年代測定法は炭素定着法である。「福井県・石川県に高度の製鉄文化を担ってテュルク人(突厥国からの渡来人)が定住したことは、ほぼ間違いない。」

③ 『旧唐書鉄靺伝』に、「鉄靺(てつろく)は匈奴から別れた種族である。突厥の勢力が強力になってから、鉄靺の諸部族は分散し、その部衆は、次第に弱小となった。唐の武徳年間(618~626)の始めのころ、15の諸部族が漠北に散在していた。」とあり、その中に骨利幹(こつりかん)がある。「骨利幹が俱利伽羅峠(くりからとうげ)の語源と思う」。

俱利伽羅峠は、石川県河北郡津幡町と富山県小矢部市(おやべ)との県境にある峠である。宝達(ほうだつ)丘陵の南端にあり、標高260メートル。両県を結ぶ交通の要地として古くから開け、604年(推古天皇12年)の開道と伝えられている。

7 渡来人の日本流入経路

武智鉄二氏の「異民族の日本流入経路5説」を紹介する。

- ① 天山北路から南シベリアにかけて居住していた突厥系(古代トルコ系民俗)のうち、鉄靺に属する骨利幹部族(あるいは複数の部族。鉄靺は35部族よりなる。)が、日本海を横断して北陸方面へ、紀元前3~400年頃、冶金術(鉄器文化)を伝来する。
- ② 漢民族の中でも最も純粋に原中国民族系である華夏系(中原河北系)民族が、紀元前200年頃、水田稲作農耕技術を持って、渤海湾から日本本州西端部(現在の山口県)へ渡来。
- ③ 中国の朝鮮植民地総督である帯方郡吏(太守)が、北九州の伊都付近に都督府を置き、卑弥呼の女王国と結んで倭の植民地化を計る。起源0年頃のことである。
- ④ 馬韓・弁韓・辰韓のいわゆる三韓のうち、弁辰系の部族が末盧(松浦)付近を占領して、弁辰の領土とする。また、韓の北隣の

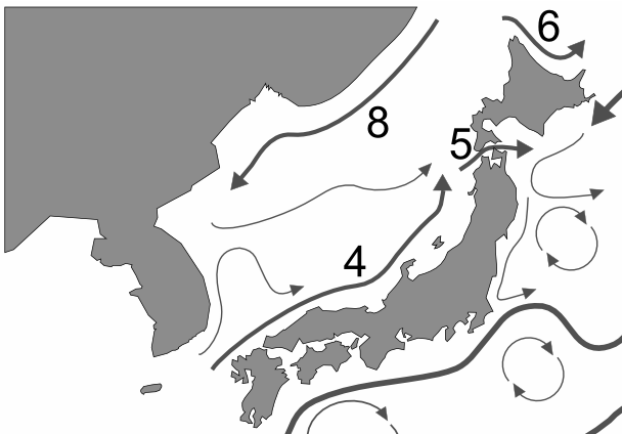
民族「濊」が、同じ頃日本へ進駐する。これが紀元 50 年ごろで、いわゆる天孫民族の日本征服がこれにあたる。

- ⑤ 宗谷海峡を渡って北シベリアの民族が侵入して日本の東北文化の基礎を築く。砂鉄生産の特殊技術である「たたら製法を伝来したのは、この種族(タタール・韃靼系)と考える。

8 若狭(ワカサ)の語源とリマン海流

福井県若狭地方は古代日本の先進地域である。若狭(ワカサ)の語源に、朝鮮語のワカソ(往き来)説がある。

リマン海流 8 を利用し、古代から大陸の文化が朝鮮半島を経由し日本に伝来した。「リマン」とはロシア語で大河(アムール川)の河口(三角江)を意味する。サハリン(樺太)の南西から沿海州に沿うようにして朝鮮半島の北東(北緯 40 度)までの海流である。間宮海峡付近からユ



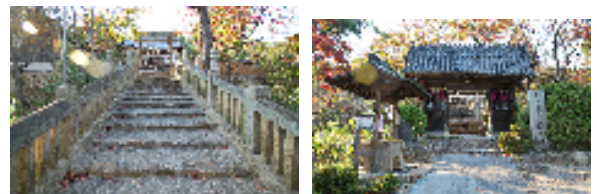
ーラシア大陸に沿って日本海を南下する海流(寒流)がある。日本海を北上する暖流の対馬海流が北上するにつれ冷やされ、アムール川の淡水と混ざり、南下する。

9 まとめ

『続神道体系』収録の『先代旧事本紀大成経』の黄蕨国との記録を「突厥国からの渡来人が建国」と解説している。『先代旧事本紀大成経・卷第十八 神皇本紀上卷下』に、吉備津彦命は、「次彦五十狭彦命、亦名黄蕨邦彦命、黄蕨臣等

遠祖也、」と記録されている。

- ① 平安時代中期に作られた辞書『和名類聚抄(わみょうるいじゅしょう)』の黄蕨国の読みは、備中(吉備乃美知乃奈加)、備後(吉備乃美知乃之利)は同一であるが、備前(岐比乃美知乃久知)のみが異なっている。氣比神宮の比の字使用に注目している。
- ② 末社擬領神社の祭神は武功狭日命(たけいさひのみこと)である。武功狭日命は吉備臣祖稚武彦命の孫である。稚武彦命で吉備国と直結する。
- ③ 氣比神宮旧日本殿内陣の桃太郎像に注目したい。女桃太郎説のモデルは誰か、吉備津彦命の姉のヤマトトヒモモソヒメを連想する。倭迹迹日百襲媛命は大物主神(大神神社の祭神)の妻である。宮内庁は箸墓古墳を倭迹迹日百襲姫命の墓として管理している。
- ④ 大吉備津彦命は伝説上の人物であるが、武功狭日命は擬大領職であり実在の人物である。
- ⑤ 「テュルク族(突厥国)の王は可汗(カカン)、王妃は可賀敦(カガトン)と呼ばれる。可汗は加賀国(石川県)の語源をなすものではないだろうか。可賀敦の下二字をひっくり返すと、そのまま敦賀になってしまう。」という武智鉄二氏説は正しいと考える。
- ⑥ 吉備津岡辛木神社(キビツオカカラキ・岡山市中区海吉)の祭神、吉備若武彦命が稚武彦命である。古くは吉備明現宮と呼ばれていた。



10 謝辞

平成 22 年 4 月 30 日に若狭哲六先生と片山伸

栄氏に化氣神社を御案内いただいた。平成 22 年 6 月 16 日に野崎 豊先生に豊原北島神社の境内摂社 氣比神社を案内していただいた。敦賀訪問前に辻野清勝氏(『本州鞍部の町 敦賀の歴史』)に敦賀の調査方法について教示をえた。平成 22 年 10 月 21 日に擬領神社の調査の為、氣比神宮を訪問し、桑原宏明氏(権禰宜)に「擬領」について質問した。「そんな難しいことは質問しないで下さい。」との回答だった。平成 23 年 2 月 26 日に大井 透氏より「擬領神社わかりました。正確には擬大領。」とのメールを戴いた。擬大領と大領との関係も明確にすることができた。

私の出生地は石川県小松市大領中町である。「大領の意味は」という子供の時からの疑問が漸くとけた。備前西大寺のルーツとされる周防国観音霊場、二井寺山極楽寺(山口県玖珂郡周東町神幡)の 1766 年の「新寺山由来記」に、「当山ハ聖武天皇ノ御宇天平年中ニ当国玖珂ノ大領秦皆足朝臣ノ草創ナリ 天平 16 年(744 年)」とある。これも大領の記録である。

11 参考文献

『北陸道総鎮守 氣比神宮』<http://kehijingu.jp/>
『氣比神社七座』
<http://21coe.kokugakuin.ac.jp/db/jinja/300101.html>
『甲斐国一宮 浅間神社』<http://asamajinja.jp/>
『日本の神々-神社と聖地 第八巻 北陸』1985 年 白水社
『改訂増補 日本神名辞典』平成 13 年 神社新報社
『吉備津神社』藤井駿 昭和 48 年日本文教出版
『日本国語大辞典 第二版②』2001 年 小学館
『日本国語大辞典 第二版⑧』2001 年 小学館
『日本国語大辞典 第二版④』2001 年 小学館
『国史大辞典 4』昭和 49 年 吉川弘文館
『古事類苑 官位部二』昭和 9 年 古事類苑刊行内外書籍(株)
『吉備津彦神社史料』文書篇 昭和 11 年 国幣小

社吉備津彦神社社務所
『福井県史 通史編 1 原始古代』平成 5 年 福井県
『敦賀の歴史』平成元年 敦賀市史編纂委員会 敦賀市役所
『氣比宮社記』昭和 15 年 官幣大社氣比神宮
『化氣神社』
<http://websakigake.sakura.ne.jp/06-134.html>
『日本古典文学体系 1 古事記祝詞』昭和 33 年 岩波書店
『日本古典文学体系 67 日本書紀上』昭和 42 年 岩波書店
『福井県の地名 日本歴史地名体系 18』1981 年 平凡社
『岡山県神社誌』岡山県神社庁
『古代出雲帝国の謎』武智鉄二 平成 2 年 祥伝社
『先代旧事本紀大成経(一)(二)(三)(四) 続神道体系 論説編』平成 11 年 小笠原春夫校注 神道体系編纂会
『平成二十年度特別展 氣比さんをつるが町衆 氣比神宮文書は語る』平成 20 年 敦賀市博物館
『美作国の成立事情』狩野 久(奈良文化財研究所) 2013. 8. 11 岡山県立博物館講演
『日本で最も古い「桃太郎」が居ました。氣比神宮』
<http://www.lococom.jp/article/view/2451926/>
『大発見! 氣比神宮・桃太郎』
<http://yoshi-bay.com/index.php?id=47>
『鯖江精機通信 創刊春号No.1 特集 氣比庄』平成 20 年 6 月 鯖江精機広報委員会 鯖江精機株式会社 福井県丹生郡越前町氣比庄 22-8 <http://www.sabaeseiki.jp>
『桃太郎と邪馬台国』前田晴人 2004 年 講談社
『氣比神宮の桃太郎は女だった』
<http://ameblo.jp/kodaitantei/entry-10279306964.html>